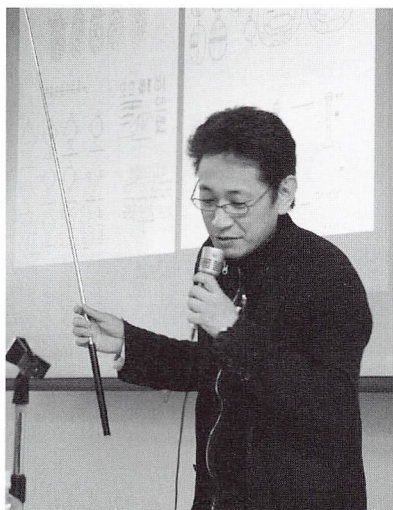


「古墳時代の馬具と馬」

朝日新聞社東京本社文化グループ 宮代 栄一 氏



1 はじめに

全国古墳や横穴など、古墳時代の埋葬施設からしばしば出土する遺物の一つに、馬具がある。馬具というのはその名の通り、馬につける道具のことだ。

現在の私たちにとって、残念ながら、馬は「身近な存在である」とは言い難くなっている。多くの人にとっては、遠くから見るもの（競馬の馬）であったり、食べるものであったり（さくら鍋、馬刺しなど）するのがせいぜいのところで、たぶん乗馬クラブにでも行かない限り、馬と直接接することさえ難しいだろう。

だが、古墳時代の人々、特に権力者たちにとって、馬は、（ここで高崎市教育委員会の若狭徹さんの言葉を借りるならば）、高級乗用車であり、トラックであり、戦車であり、かつトラクターでもあるという、複合的で、かつ極めて重要な存在だった。その希少価値は現在の乗用車の比ではなく、誰もが乗れるものではなかったのである。

実際、馬にかかわる考古学的な痕跡が見つかることも、それほど多いとは言えない。馬にとりつける馬具や、遺跡に残された蹄の跡、さらには埋葬された遺体などが出土すれば良い方で、私たちはこれらの残されたわずかな資料から古代の馬にかかわる文化について探っていかなければならないのである。

中でも、「馬具」は重要だ。馬具は当時の技術の集合体であり、そこには彫金、鍛金、メッキなどといった、古墳時代のハイテクの技が惜しげもなく投入されている。それらを詳しく調べれば、作った人間やそれを注文した人間、さらにはそれをもたらした人間たちの社会的関係まで見えてくるかもしれない。考古学者たちが、古墳時代の馬具の研究をするのはこのような理由による。

馬具について詳しい話をする前に、その各部の呼び名について整理しておこう。古墳時代の馬は、多くが「飾り馬」といって、馬の制御には直接関係がない様々な装飾品をつけている点に特徴がある。

まず、轡や鞍などについて、現代の馬具と古墳時代の馬具を比較してみよう。古墳時代の「轡」が手綱を取り付ける「引手」の部分まで金属で造っているのに対し、現代の馬具は口の中に収まる「銜」の部分と頬の部分にあたる「鏡板」のみを金属で造っている点が大きくことなる。また現代では、鏡板は環状か棒状で、古墳時代に多い板状のものをつけることはほとんどない。鞍も現代乗馬で用いられるのは、すべてが革で造られたもので、古墳などから出土する、木製の鞍の表面に金属板を取り付け、飾り立てた鞍は使われていない。

古墳時代の馬具は、「三繫」と「鞍」によって構成されている。三繫とは3種類のベルトのことで、頭につけるのを「面繫」、胸につけるのを「胸繫」、尻につけるのを「尻繫」と呼ぶ。

このうち、面繫には、馬を制御するための馬具である「轡」のほか、繫の交差部分を留める金具である「辻金具」などが装着されることがある。

胸繫は文字通り、胸を飾るベルトのことで、銅鐸の馬具版ともいえる「馬鐸」や、カウベルなら

ぬ「馬鈴」が取り付けられることがある。

馬の背に置かれて、人が乗るのが「鞍」である。古墳時代の鞍は、人が乗る「居木」と呼ばれる板の前後に、垂直の板2枚を取り付けた「両輪垂直鞍」と呼ばれるものだ。

鞍は腹帯を介して、しっかりと馬体に固定され、鞍の下部には、乗る人間が足を固定させるための「鐙」^{あぶみ}がつり下げられる。

尻繫は、鞍の後部から出て、尾と尻を周回し、また鞍の後部へと戻る。その間に、板状の飾金具である「杏葉」^{きょうよう}や、ベルトの交差部分につける「雲珠」「辻金具」などが取り付けられる。

たくさんの馬具をあげてきたが、馬具のうち、最も大事なのは、馬をあやつるための「轡」であり、次いで乗る場所である「鞍」、さらに乗るときや騎乗で姿勢を保つための鐙だろう。古墳時代によくみられる杏葉などは、乗馬という用途に限れば本来必要がないものだ。しかし、実際には、その必要のないものが大量に制作され、豪族たちの墓に次々と納められた。このことは、古墳時代の馬が単なる乗るためだけの存在、ではなかったことを示唆しているのではないか。

2 中国～朝鮮半島の馬文化

世界史的にみると、人間が馬に乗るようになったのは、紀元前3500～3000年ごろのことと考えられている。アジアで、最古の馬にかかわる痕跡が残されているのは中国だ。紀元前2000年代の商代には、馬に引かせる戦車が使われていたことがわかっている。また、紀元前307年になると、趙の武靈王が、騎馬民族との戦いの中で、彼らの服装と馬の上から矢を射る方法を採用入れたという故事（胡服騎射）も記録されている。

さらに、少し後の秦の時代になると、始皇帝の兵馬俑の中に、馬がひく戦車と騎馬兵の俑がそれぞれ確認できる。これらのことを考えると、遅くとも紀元前4世紀ごろには、中国においても騎馬兵の採用が本格化していたといえるのではないか。

中国の騎馬の文化は、朝鮮半島をへて日本列島へともたらされた。これらのルーツを考える上で大切なのが、中国東北部の五胡十六国時代（4世紀初め～5世紀中頃）の遺跡群だ。

遼寧省の朝陽袁台子東晋壁画墓、同省の朝陽十二台郷磚廠88M1号墓、河南省の安陽孝民屯154号墓などからは、日本の馬具の源流の一つと考えられる板状鏡板付轡や輪鐙、杏葉、鞍金具などが出土しており、年代はいずれも4世紀後半と考えられている。中でも、朝陽十二台郷磚廠88M1号墓の透彫り入りの鞍金具は、大阪府の誉田丸山古墳から出土したよく似た造りの鞍金具を考えるうえで極めて重要だ。

板状の鏡板を用いる馬具の系譜は、五胡十六国からやがて朝鮮の高句麗へと受け継がれ、さらにそれは南の百済や新羅へ波及し、最後は日本列島へ至る。

だが、その過程で、板状鏡板付轡や杏葉が多様化するなど、朝鮮半島内部で独自の発達をみるに至った。日本の古墳時代馬具はその影響を色濃く受けつつ、成立・発展したといえることができる。

3 日本の馬文化－馬がやってきた

では、馬は日本列島にいつやってきたのか。かつては、貝塚などから出た馬の骨を根拠に、縄文時代にすでに馬がいたと主張する研究者もいた。しかし、これらは最近の理化学的分析で、いずれも後の時代の骨が混入したものであることが明らかになっている。中国の歴史書「魏志倭人伝」に、「倭に牛馬はいない」との記述があることからみても、弥生時代以前の日本には馬はいなかったのだろう。

現在までのところ、日本列島における最も古い馬の痕跡は、馬の埋葬遺体という形で、4世紀後半まで遡ることができる。馬具では、奈良県箸墓古墳の周溝から出土した木製輪鐙などが最古のものだ。このほか、金属製の轡類としては、兵庫県行者塚古墳などから出土した、方形ないし円形の板状鏡板付轡類が最も古いものの一つになる。

古墳時代の馬具は、当初からかなりバラエティーに富んでおり、多くは、轡だけでなく、鞍・鐙・杏葉などひと揃いの馬具を備えた「セット」を構成していた。滋賀県新開古墳南遺構から出土した馬具類などはその典型である。

日本の古墳時代で、よくみられる馬具の組み合わせの一つが、f字鏡板付轡と剣菱形杏葉である。f字形鏡板付轡は、馬の頬にあたる鏡板の外形が英語の小文字の「f」に似ているので、このように呼ばれる。当然のことながら、当時の人たちがこのように呼んでいたわけではない。

剣菱形杏葉は、楕円形に菱形をくっつけたような外形の杏葉である。この二つの馬具を中心とする馬装は、5世紀から6世紀にかけて、日本列島内で盛んに用いられた。長野県宮垣外遺跡から出土したf字形鏡板付轡のセットもその一つである。このほか、鉄製の楕円形鏡板付轡を中心とする馬具のセットや、埼玉稲荷山古墳から出土したような、f字形鏡板付轡に鈴杏葉を組み合わせたセットも用いられた。

6世紀になると、轡や杏葉の種類が急増する。それまでのf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉に加え、楕円形で三葉文をあしらった鏡板付轡や杏葉、鐘形の鏡板付轡と杏葉などが、次々と登場する。出土馬具数は全国で2000セットを超え、装飾的な板状鏡板付轡に加えて、実用性の高い、鉄製で環状の鏡板付轡が多く用いられるようになった。その一方、f字形鏡板付轡はより装飾性を増し、大型で縁の部分に鋸をたくさん打ち込んだものが多く造られるようになる。

6世紀中ごろになると、f字形鏡板付轡は次第に造られなくなり、代わって、心葉形鏡板に十字文を配した鏡板付轡が登場する。一つは埼玉將軍山古墳出土品にみられるような、十字文だけをあしらった鏡板付轡であり、もう一つは静岡県賤機山古墳出土品などにみられるような、十字文に鳳凰や唐草の文様をあしらった鏡板付轡である。これらにはいずれも、棘のついた葉のような形をした「棘葉形杏葉」が伴う。

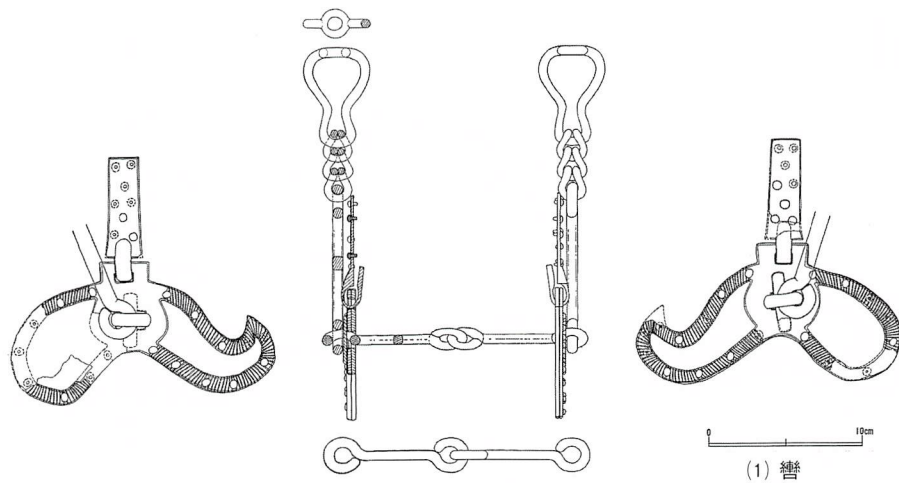
この種の「棘葉形杏葉」は、今述べたように、当初は心葉形十字文の鏡板付轡とセットになっていたが、6世紀後半になると、福島県笹内37号横穴出土品にみられるような、鏡板も杏葉も同じく「棘葉形」に作る型式へと切り替わっていく。これはこの種の馬具に対する当初のセット意識が失われ、当時はやっていた、鐘形鏡板付轡・杏葉のセットに見られるような、轡と杏葉を同じ形に作るというパターンを導入した結果と考えられる。

日本列島の馬具は4世紀末に朝鮮半島から到来して以来、朝鮮半島からの影響を断続的に受けながら、発展を遂げていった。その構成は当初から、轡・鐙・鞍などが揃ったフル装備であり、5世紀後半にはすでに、鈴杏葉など、日本列島独自の馬具を生み出した。同時に、鉄板の表面に金銅板を張る「鉄地金銅張」の技法も採用され、その後、多くの馬具に用いられる。しかし、7世紀以降は、金銅製や鉄製の馬具が主流となっていく。

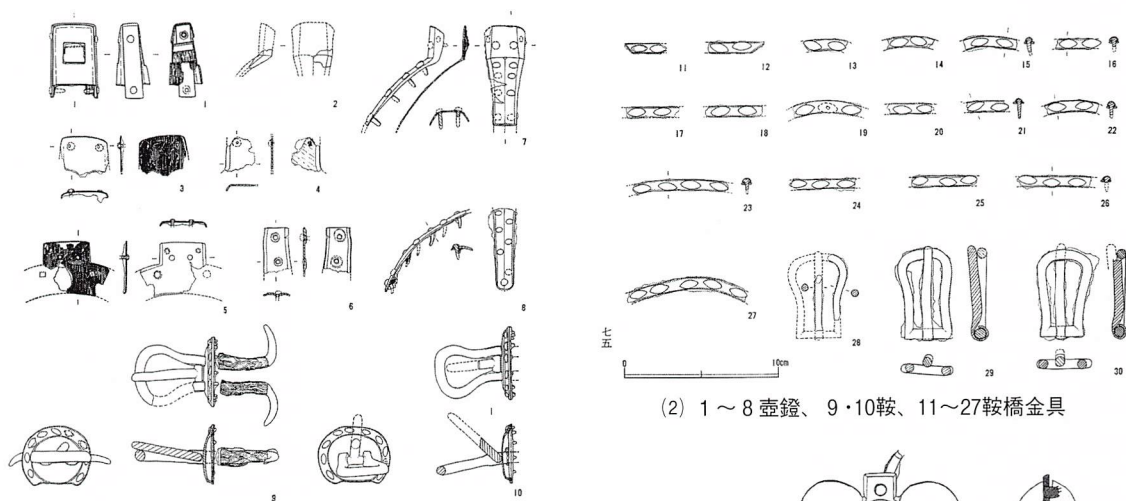
4 埼玉古墳群の馬具

次に、この博物館がある埼玉古墳群から出土した馬具について話したい。埼玉古墳群にある数十の古墳のうち、馬具が出土しているのは、埼玉稲荷山古墳と埼玉將軍山古墳の2基だけだ。

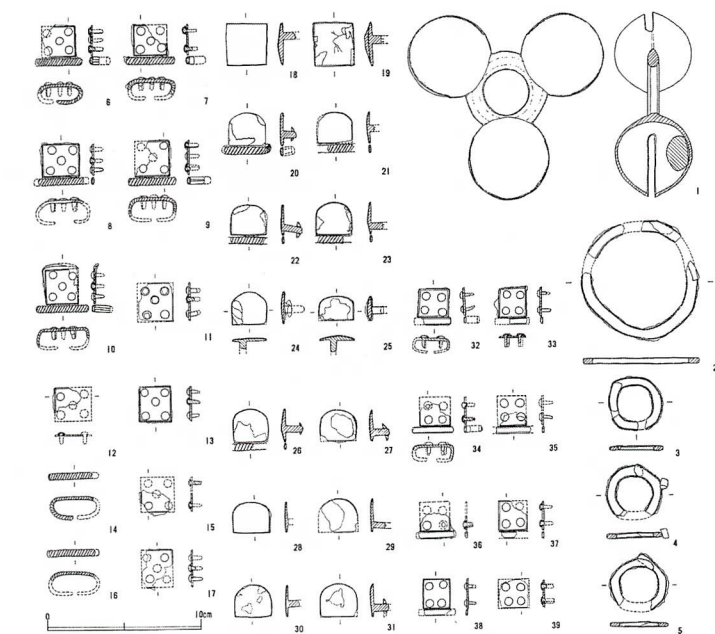
このうち、埼玉稲荷山古墳は全長120mの前方後円墳で、その第一主体部（磔櫓）から、f字形鏡板付轡1組、板状組合造辻金具3、鞍金具1組、木芯鉄板張壺鐙1組、環状雲珠1、同辻金具3、



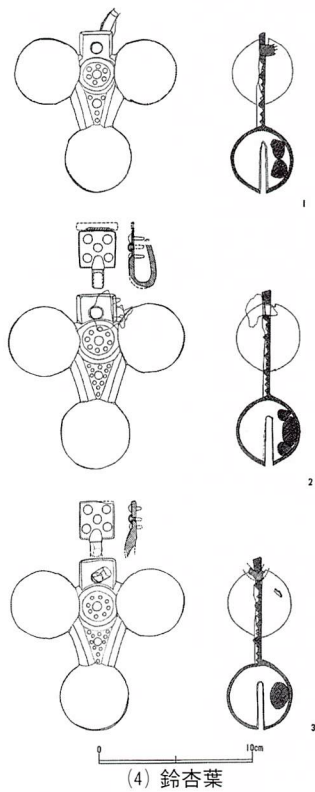
(1) 轡



(2) 1~8 壺鐙、9·10鞍、11~27鞍橋金具

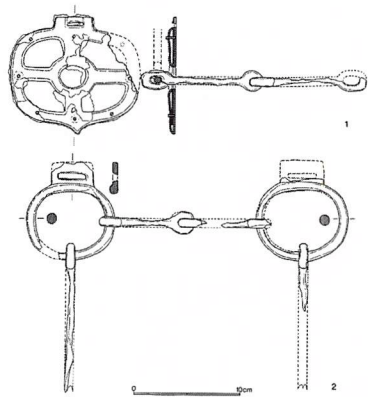


(3) 1 三環鈴、2·6~17雲珠、3~5·18~39辻金具

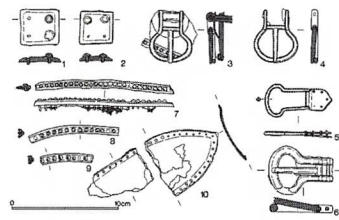


(4) 鈴杏葉

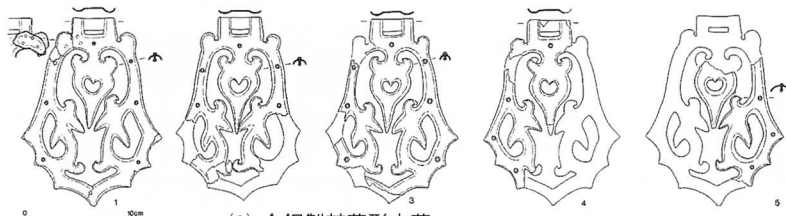
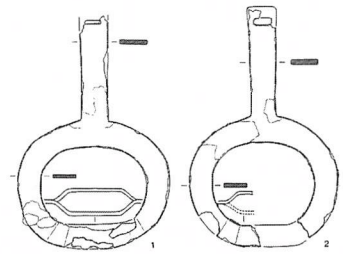
图1 埼玉稻荷山古墳第1主体部出土馬具



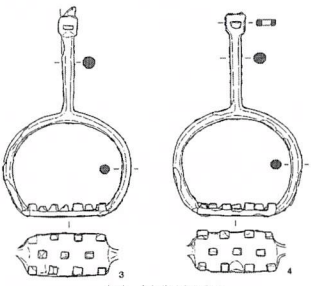
(1) 轡



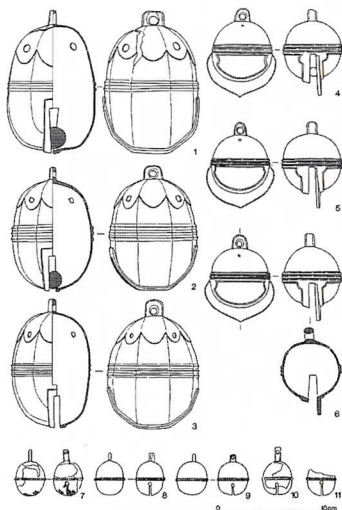
(2) 鐵地銀張飾金具、鞍金具、紋具



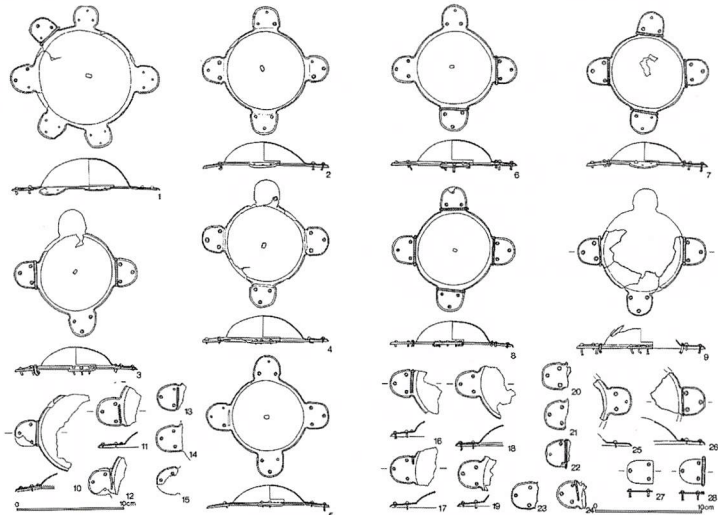
(3) 金銅製棘葉形杏葉



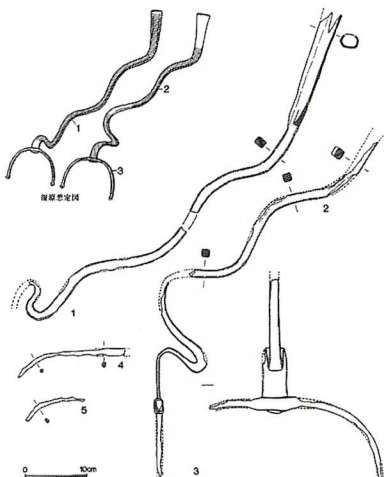
(4) 鐵製輪鐙



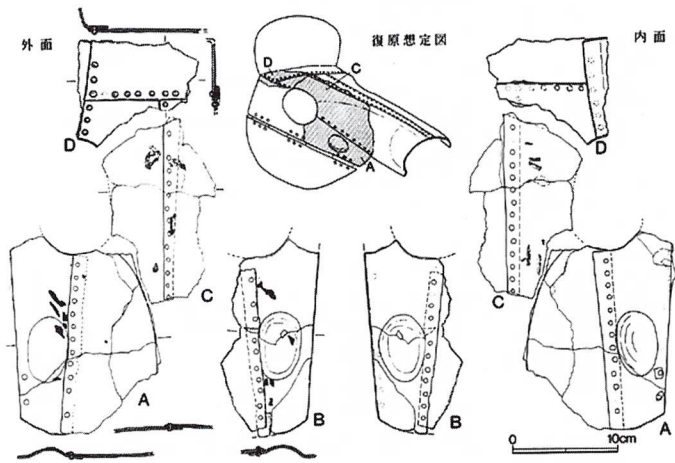
(5) 銅製八角稜鈴、銅製鈴、金銅製鈴



(6) 金銅製雲珠、金銅製辻金具



(7) 蛇行狀鉄器



(8) 馬鞍

图2 埼玉将军山古墳出土馬具

鈴杏葉3、鉸具3などが出土した。また、盗掘を受けていた第二主体部（粘土槨）からは、板状組合造辻金具3、鉸具4、轡破片、轡に使われた鉤金具の一部などが出土した。これらはこのさきたま史跡の博物館で見ることができる。

一方、埼玉将軍山古墳は全長90mの前方後円墳で、横穴式石室から、心葉形十字文鏡板付轡1、環状鏡板付轡1組（うち1点の鏡板は所在不明）、棘葉形杏葉5、鉄製輪鐙2組、鞍金具2組、鑄造鈴6、金銅鈴5以上、鉢状雲珠6、同辻金具13以上、飾金具10、鉸具2、蛇行状鉄器2、馬冑1、馬甲1が出土した。これらは一部、この博物館でみることができるが、多くは東京大学総合研究博物館、東京国立博物館などに収蔵されている。

二つの古墳から出土した馬具を観察してみると、埼玉稲荷山古墳では、第一主体部、第二主体部ともに1組ずつの馬具しか埋葬されていないのに対し、埼玉将軍山古墳は2組の馬具を埋葬していることがわかる。馬具の時期は、埼玉稲荷山古墳が須恵器の型式でいうところのTK47型式期（5世紀末）、埼玉将軍山古墳が同じくTK43型式期（6世紀後半）だろう。ただし、埼玉稲荷山古墳の第一主体部と第二主体部、及び埼玉将軍山古墳から出土した2組の馬具に関しては、年代差を認めることができない。

埼玉稲荷山古墳から出土した馬具のうち、他の出土例などから、私が「板状組合造辻金具」と呼んでいる、この種の扁平な辻金具は、面繫に装着されたことがわかっている。第一主体部では、それとは別に環状辻金具が3点出土した。これらを矛盾しないように配置・復元したのが、この尻繫復元図である。環状雲珠は8脚であり、その前方、鞍に近い部分に、環状辻金具3点が配される。脚の配置がやや偏っているように見えるかもしれないが、このような脚配置は、京都府宇治二子山南墳などで確認されており、根拠がないものではない。同様に、被葬者の武装と馬装の復元図も作成してみた。

面繫にf字形鏡板付轡と板状辻金具3点をつけ、尻繫には環状雲珠・辻金具と3点の鈴杏葉をつける。実際は第一主体部からは多数の刀が出ているのだが、作図の制約上、被葬者には1振を持たせるにとどめた。挂甲と槍についても、同じ理由であえて欄外に提示した。あくまでイメージと思っていたきたい。

埼玉将軍山古墳についても、棘葉形杏葉を伴う方のセットについて、尻繫の復元図と馬装の復元図を作成した。まず尻繫についてだが、このような偏在する六脚を持つ鉢状雲珠を中心とする組み合わせについては、千葉県江子田金環塚古墳の出土例が参考になる。雲珠の左右と後方に辻金具4点を配し、5点の杏葉を配した。

面繫には、心葉形十字文鏡付轡と鉢状辻金具6点を配し、残りの辻金具3点は尻繫の雲珠の前方に取り付けた。また、金銅鈴については、雲珠・辻金具の頂点にいずれも穴がうがたれていることから、本来は雲珠・辻金具に取り付けられていたものと想定した。さらに鑄造鈴については、胸繫に取り付けられていたと考えた。被葬者については、2振の刀を持たせ、衝角付冑を着用させている。挂甲と槍については、埼玉稲荷山古墳と同様、作図の関係で欄外に提示した。このような復元図を作成する作業は、仮説や制約が多く、ややもすると、固定化したイメージを植え付けてしまう可能性もあるが、それを差し引いても、実際に具体像がみられるという利点は何ものにも代え難い。

話は変わるが、この場を借りて、一つ重要な事実を喚起しておきたい。それは現在、名古屋市南山大学に保管されている、一枚の心葉形十字文鏡板についてである。同大の黒沢浩さんによれば、この鏡板は同大が古美術商から購入したもので、群馬県内の出土品とされている。

この轡は、これまで形や材質がよく似ていることから、埼玉将軍山古墳出土の十字文鏡板付轡（図2(1)）の類例として、しばしば研究者の間で取り上げられてきた。しかし、最近興味深い事実が明らかになった。実はこの2枚の鏡板はもともと1対だったというのだ。

このことを教えてくれたのは、栃木県埋蔵文化財センターの内山敏行さんである。内山さんによれば、彼はある日、八幡一朗著『日本考古図録大成・第五輯 馬具』（1930年、日東書院）の中に「武蔵国将軍山古墳出土」と記された一枚の十字文鏡板の写真を見つけた。ところが、この写真にある鏡板は、その形や欠け具合などが、現・東京大学総合博物館収蔵の埼玉将軍山古墳出土鏡板とは異なっている。「とすれば、現存していない、もう一枚の鏡板か」とさらに調べたところ、南山大所蔵の群馬県出土とされている鏡板と、外形や欠けた部位などが一致することがわかったのだという。

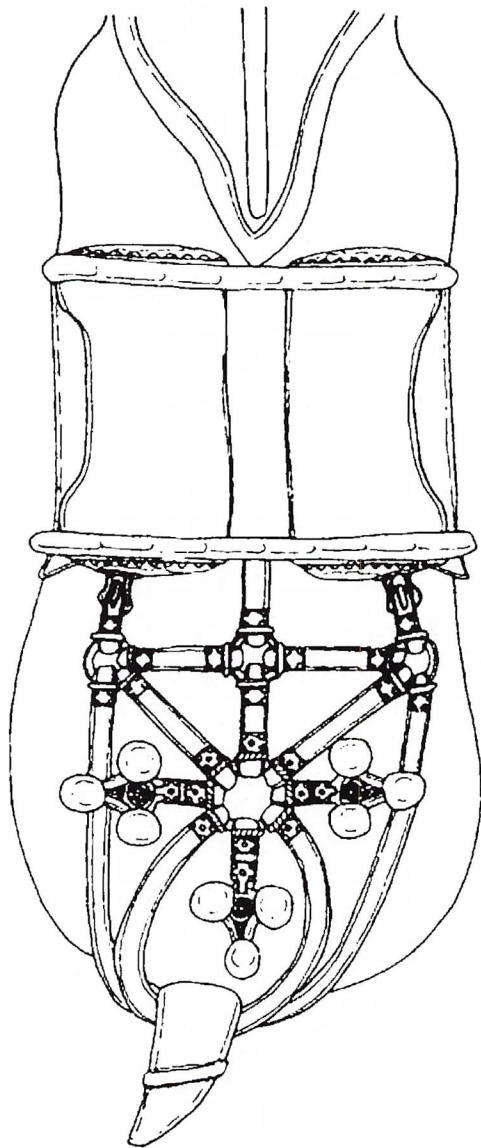


図3(1) 尻繫の復元（埼玉稲荷山古墳）

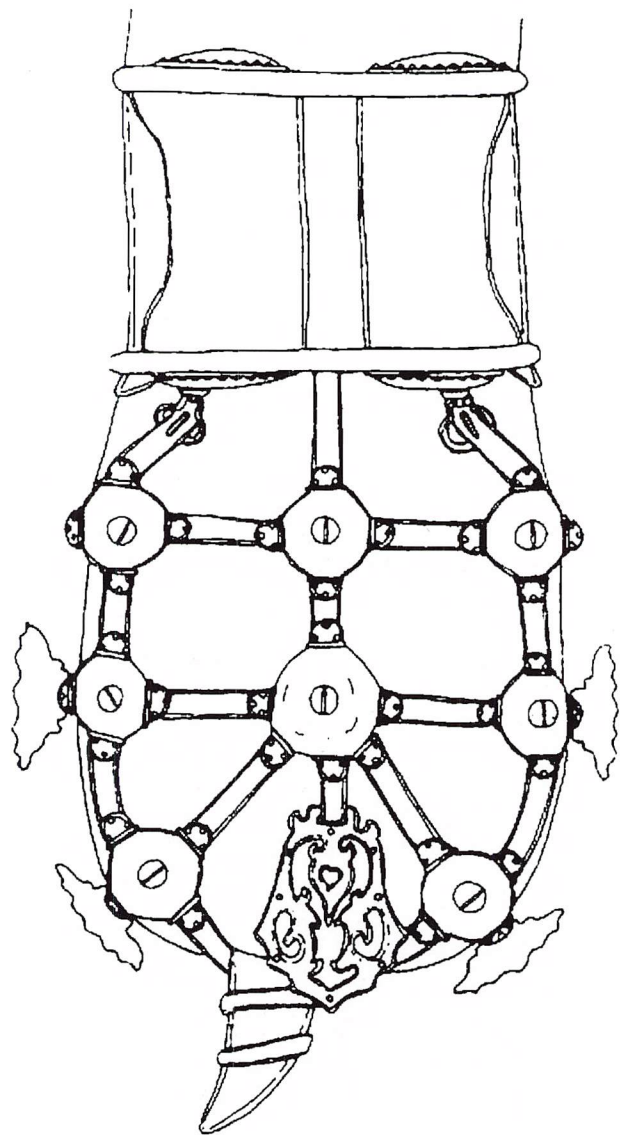


図3(2) 同左（埼玉将軍山古墳）

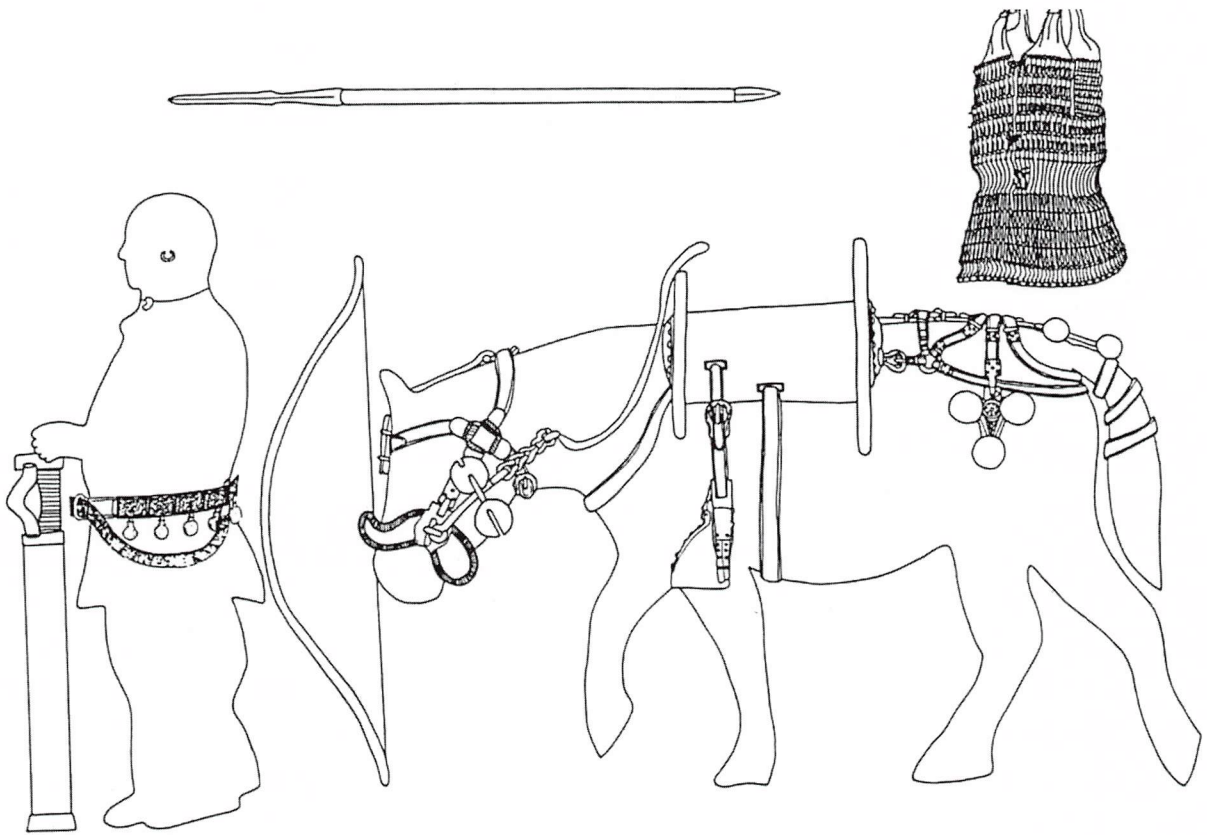


図4(1) 馬装の復元（埼玉稲荷山古墳）

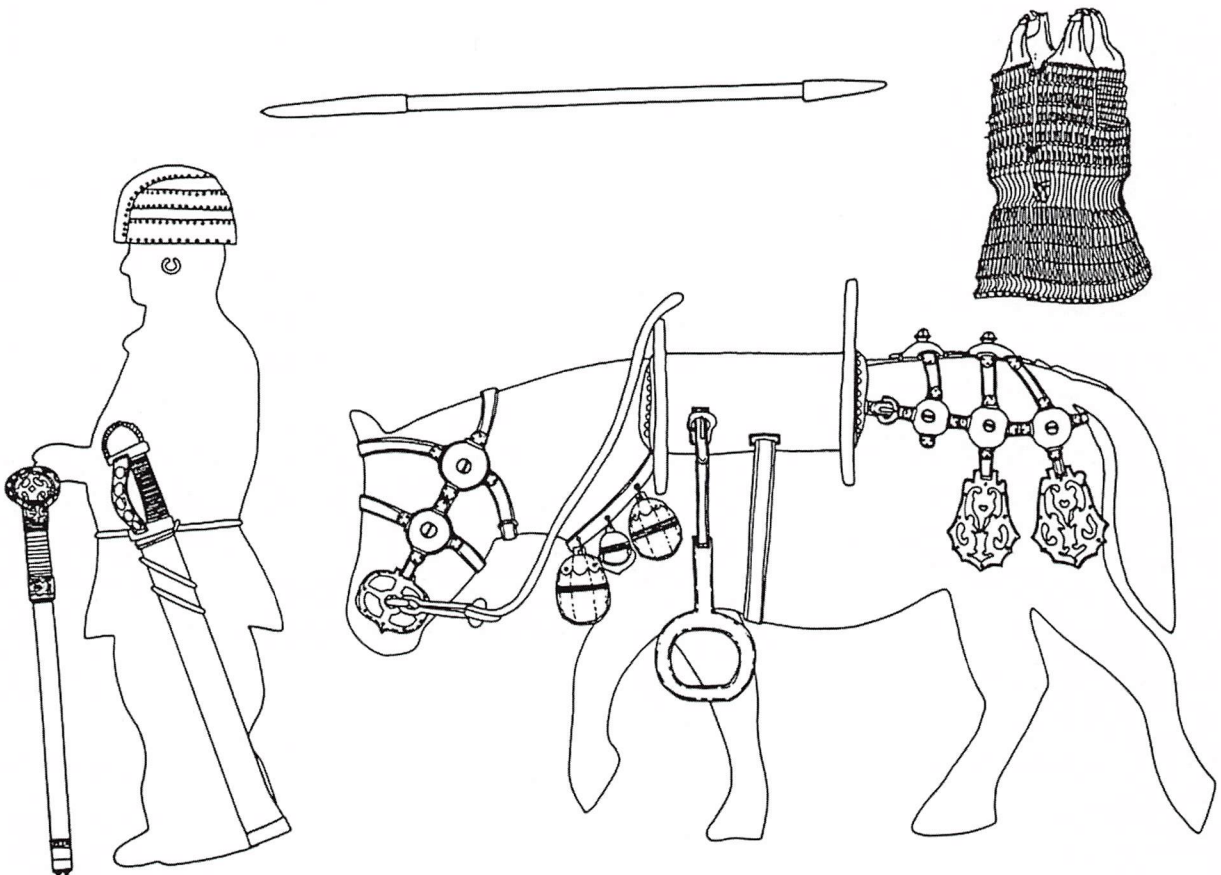


図4(2) 馬装の復元（埼玉将軍山古墳）

私はこのことを内山さんとの雑談でうかがった。その後、南山大でくだんの鏡板を実測させていただき、実物と『考古図録大成』の写真も見比べたが、同一品である可能性は極めて高いと思う。

これらのことから以下の推論を導くことができる。すなわち現在、南山大学に収蔵されている十字文鏡板と東大総合研究博物館の十字文鏡板は、もともと一対であり、いずれも埼玉将軍山古墳の出土品である可能性が高いこと。さらに、もともと収蔵されていたはずの東大から、現・南山大所蔵の鏡板がいつどうやって持ち出されたのかはわからないが、それが古美術商などに売却される過程で、その出自が偽られたか誤伝され、出土地が本来の「埼玉」ではなく、隣接県の「群馬」とされたであろうこと、である。

5 騎馬兵と近代騎兵

「騎兵」というと、皆さんはどんなイメージを思い浮かべるだろうか。多くの人は、戦国時代のドラマや映画で見られるような、馬に乗った鎧武者たちの突撃風景を想起するのではないだろうか。しかし、実際にはああしたシーンが行われたことはほとんどなかった。

戦国時代に日本を訪れた宣教師ルイス・フロイスは、当時の騎馬武者について「彼らは突撃の前に、馬を降り（後方に下げ）てしまう」と記している。実際、そのころの馬は貴重品だったので、戦闘などで簡単に失うわけにはいかなかったのだ。

よく騎兵というと、その破壊力と卓越した移動力ばかりが言われるが、それは騎兵だけを集めて、集団として用いた時に初めて有効に発揮される能力であり、それらが十分に生かされるようになるのは、近代騎兵の成立以降であった。足軽などの「歩兵」と、騎馬武者と一緒に行動していた日本の戦国時代などでは、そのような状況はなかなか望みにくかったと思われる。

では、なぜ馬に乗る必要があるのだろうか。一つは追い討ちをかける時などに便利（追撃戦なら比較的損害も少ない）だったからであり、もう一つは「騎乗の士」という身分を示すものであったからと思われる。すなわち、馬に乗って何かをするというより、乗ること自体に意味があったのだ。

私は古墳時代についても、似たような状況だったと考える。確かに、古墳時代の馬具は、ともすると、特定の古墳群に集中する傾向がみられ、これらのことなどから、「古墳時代にも騎馬軍団があった」と考えている研究者は少なくない。

しかし、今述べたように、戦国時代でさえ、日本列島では騎馬兵だけを集団で用いることは一般的でなかった。とすれば、馬具がある程度出土したからといって、即、「古墳時代に騎馬軍団があった」というのは早計であろう。もちろん、武装して騎馬に乗れる人間（騎馬兵）はいただろう。しかし、それが、イコール騎馬軍団の存在を証明することにはならない。

では、古墳時代の騎馬兵とは何なのか。私は、後の「騎乗の士」のように、当時、馬に乗れることは権威と力を示すものであり、兵種としては、あくまで歩兵の指揮官に過ぎなかったと考える、これは、少なくとも近代的な意味での「騎兵」ではない。

これまでにもしばしば指摘されてきたことだが、日本列島の馬具出土古墳からは、必ずしも槍や矛が出土しないケースが多い。これは西欧などの「槍騎兵」のイメージとは大きくことなる。古墳時代の騎馬兵は弓矢と刀が主武器であり、高句麗の古墳壁画などにみられるように、馬自体が甲冑で武装するということがほとんどなかった。

私は、古墳時代の騎馬兵は、その存在自体に大きな意味があったと考えている。馬は移動できる指揮台であり、そこからは遠くを見渡すことができ、さらには遠くからもその存在を感知することができた。すなわち、「大将ないし指揮官」の存在をアピールするものだった。加えて、日常から馬を養っておくには金がかかる。その意味でも、馬は財力と権威のシンボルであった。

古墳時代の飾大刀の中には、斬り合ったら即壊れてしまいそうな、きゃしゃな構造のものがしばしば見られるが、それらは職掌と権威の象徴であった。

同様に、古墳時代の豪華な馬具類も、実際に使われていたとはいえ、基本的には、その存在自体が力であり、権威の象徴だったのではないだろうか。

6 馬具から見えてくること

これまで埼玉古墳群の出土品などを例にひきながら、古墳時代の馬具がもつ役割やその変遷などについて話してきた。では、私たちは馬具から何を読み取ることができるのだろうか。以下の5点をあげておきたい。

一つはその馬具の系譜、すなわち、どこで作られて、どんなふうに変化してきたのか、といったことを知ることで、それを作った人々や使った人々、さらには文化の流れが見えてくるということだ。

もう一つは編年、すなわち時代を測るものさしとしての機能である。古墳時代の馬具については現在、非常に精緻な編年が組まれているため、破片でも出ていれば、その古墳の年代を4半世紀単位で知ることができる。

もう一つは技術である。最初にお話したように、古墳時代の馬具は当時の最新技術の集合体だ。だから、そこに使われている技術を詳細に調べることで、それを作った制作者の集団が見えてくる。

馬具に使われている意匠（デザイン）についても同じことが言える。異なる種類の馬具に同じ模様が使われていたり、逆に、異なる轡なのに、よく似た馬装の編成をしていたりする場合は、それらの間に、双方のデザインにかかわった工人の長のような存在を推測すべきだろう。

馬具が副葬された古墳についての研究も重要だ。古墳の形や大きさ、その内部主体、さらには他の出土遺物について調べることで、馬具を伴って埋められた人々の社会的な地位や、彼らがかかわった当時の政治的な関係を知ることができる。繰り返しになるが、古墳時代馬具の研究は、馬具本体のみならず、その背後にある当時の技術や政治的關係にまで迫ることができるという点で重要なのである。

7 その後の馬－馬と私たち

古墳時代の人々にとって、馬は輸送手段であり、権威の象徴であり、軍事力であった。では、古墳時代以降、私たちと馬のかかわりはどう変わってきたのか。

結論から言うと、古墳時代以降、馬たちは、軍用馬、農耕馬としての側面を保持しつつ、信仰の対象となっていった。数多く出土する「土馬」の存在が、それを物語る。今も神社に奉納されている「絵馬」などにも、信仰の一端を見て取ることができるだろう。

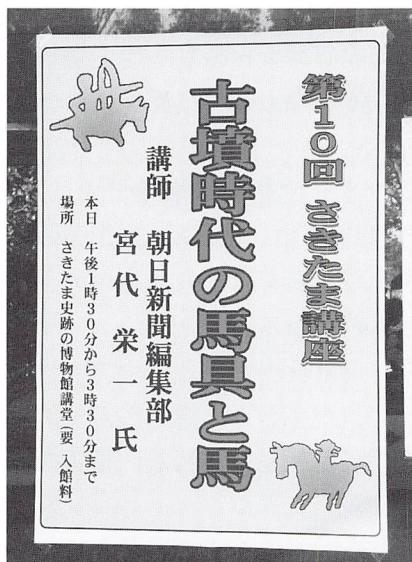
私たちにとって身近な存在だった馬の意味づけが大きく変わったのは、日清・日露戦争であった。

1906（明治39）年、明治政府は馬政第一次計画を施行、北海道や東北を中心に、約150万頭いた在来馬の品種改良計画に取り組んだ。これはそれまでの馬格の小さな在来馬を、より体格の大きな軍用に適した馬に変えていこうというものだった。その結果、馬は兵器となる。

ここに掲げたのは第二次世界大戦当時のポスターだが、この通り「馬は兵器だ」と、一言大きく書いてある。当時は軍馬の出征式も行われ、腹がけに日章旗をつけて、たくさんの馬たちが戦場へと駆り出されていった。戦争が終わる1945年までに、約50万頭が死亡したとも言われる。軍馬の馬匹連名簿なども残っているが、死因をみると、やはり戦死が圧倒的に多いようだ。

馬は5000年も前から、私たち、人間のパートナーを務めてきてくれた。しかし、人間は、自らの

都合で、彼らに大きな苦難を負わせ、犠牲を強いてきた。人と馬との今後を考えると、私たちはこうしたことを決して忘れてはならないと思う。



ご講演の様子

案内ポスター